



MEIKYU YUUGI
迷宮遊戯

著 へろー天気

CHARACTERS

登場人物紹介

●ジュジュ

穢れ山の麓の魔核が人型になった姿。穢れ山を支配している。性格は好戦的。

●ハイスーク領主

今は弱小貴族だが、迷宮核との出会いによって成り上がっていく。

●迷宮核（人型）

迷宮核が人型になった姿。

●迷宮核（核型）

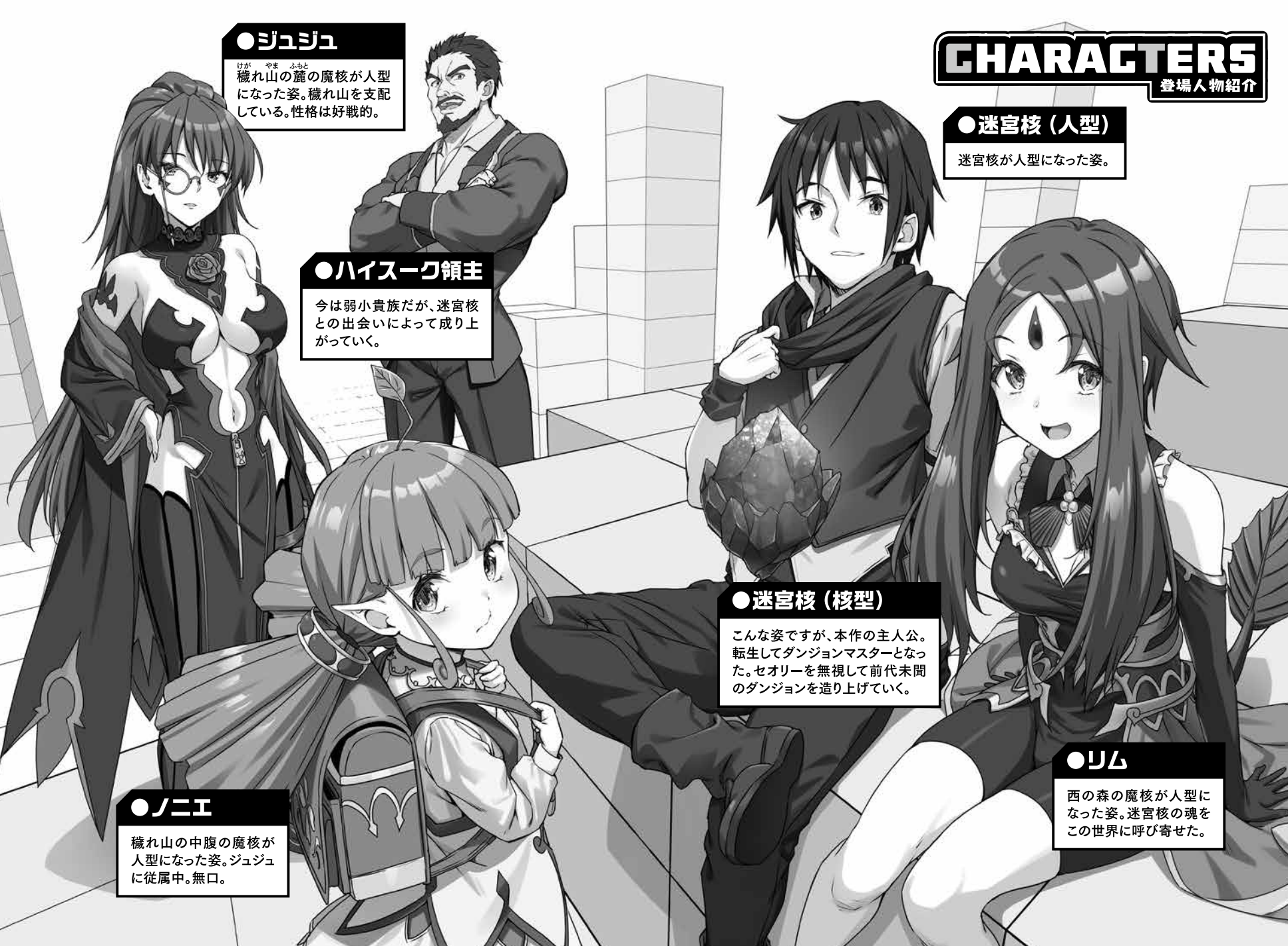
こんな姿ですが、本作の主人公。転生してダンジョンマスターとなった。セオリーを無視して前代未聞のダンジョンを造り上げていく。

●ノニエ

穢れ山の中腹の魔核が人型になった姿。ジュジュに従属中。無口。

●リム

西の森の魔核が人型になった姿。迷宮核の魂をこの世界に呼び寄せた。



変わり者の迷宮核 編

プロローグ

リソースが足りない。

スペックが足りない。

もっとたくさん造りたいのに。

彼、真知田一成が現代世界で生きていた頃に、心を占めていた不満と願いがそれだった。

子供時代、初めて遊んだ街づくりのゲームに魅せられ、クラスメイトのゲーム友達が格闘ゲームやRPGで盛り上がりつつある時も、彼はひたすら街づくりゲームに勤しんだ。

成長し、自分でお金を稼げる年代になると、ゲーム機の街づくりソフトでは物足りず、パソコンで遊べる自由度の高い箱庭ゲームにのめり込んだ。

パーツを組み合わせて自らデザインしたオブジェクトを駆使し、世界に自分だけの完全オリジナル

ルな街をつくれるというのは彼を夢中にさせた。ゲームのシナリオなどそっちのけで、とにかく街づくりで没頭。時折オンラインで公開される彼の街はあまりにも広大で、プレイヤーの間でもよく話題になっていた。

しかし、リソースを気にせず思うがままに造れば造るほど、膨らんでいく街の規模にパソコンのスペックも追いつかなくなって、処理落ちが始まり、最後はフリーズしてしまう。自分の街をつくりたい。

もっと広げたい。

その強烈な渴望と欲求の心理が、彼を異界に引き寄せた。

※ ※

常に拡大と成長を望む『魔核』と呼ばれる瘴気の塊。

ある程度の濃さを得た瘴気の塊が、多少でも知性を持つ生物の意思が混じった魔力溜まりに触れる事で稀に発生する魔核は、自らを成長させてくれる存在を次元の狭間から呼び寄せた。

西の森の魔核——リムは美しい女性の姿として顕現し、呼び寄せたその存在——真知田一成の魂に向けて告げる。

「どこかの世界より招かれし先導者よ。あなたはダンジョンマスターに選ばれたわ」

「ダンジョン？ ダンジョンって地下迷宮だろ？ 地下迷宮なんて興味ない。俺は街が造りたいんだ」

しかし、異界より呼び寄せられた彼が示したのは意外にも拒絶の意思。

その拒絶の意思とは関係なく、ダンジョン育成の知識が流し込まれる。そうして彼は『迷宮核』となった。

迷宮核は自らを中心に拡大、成長していく事を望まれている。

「だから、地下迷宮なんて興味ないんだって」

さらに知識の流入は続く。

迷宮核の維持に必要なのは有機系魔素と無機系魔素。有機系魔素は迷宮核の影響下にある空間に生物が存在する事で得られる。

有機系魔素は、強い生命力と高い魔力を内在した生物を吸収すればより多く得られる。

無機系魔素は、ダンジョンの拡大によって組み込まれた新たな土地から吸収できる。良質の鉱床を含んでいたり、緑豊かであったりする土地であれば、多くの無機系魔素を得られる。

そうして吸収した魔素の量が増えれば増えるほど魔核の力も強くなり、迷宮核の影響範囲も広がっていく。

「……うん？ それ、別に地下迷宮にしなくてもいいんじゃないか？」

自らの意思を無視して続けられる知識の流入を受けているうち、彼は魔核を成長させるための魔

素を得る収集法が、地下迷宮である必要性に疑問を感じた。

するとその疑問に答えるかのように、魔核の価値に関する情報が流れ込んでくる。

魔核は通常、宝石のような形で非常に強い力を有している。そのため人間に利用され、その暮らしを支える魔導製品全般を稼働させるエネルギー源として重宝ちゆうぼうされている。

つまり、人間の手に堕おちた魔核は、内在する魔力が枯涸こくわくして空っぽの宝石となり果てるまで、その力を吸われ続けるのだ。

拡大と成長こそが自らの存在意義である魔核にとって、それは恐ろしい地獄じじく。

ゆえに、自らを隠して護ってくれる深い地下迷宮と、その迷宮を通じて大量の魔素を収集できる迷宮核によるダンジョンの運営は、魔核にとって必然の生存戦略であった。

だが、迷宮核に適合する魂を呼び寄せる事はできても、その思考まではコントロールできない。

迷宮核に呼び込まれる思考の素もと——人格や本能、精神といった『考える機能』は、引き寄せられた魂それぞれで、戦いを生業なまわいにしていた者や、政治を生業にしていた者など様々。当たりを引けば巨大ダンジョンに育つし、ハズレを引けば早々に攻略されて人の手に堕おちる事になる。

「迷宮核その身を置く空間を指定して」

しばらく経つてリムによる知識の流入が終わると、最後にダンジョンの起点を求められた。

彼の意識に、リム周辺の地形が浮かび上がる。

彼を呼び寄せたリムは、森に囲まれた空き地のような開けた空間の中心付近、枯れた泉の底に渦うず巻いていた。

ここにダンジョンの入り口を発生させようとしているリムは、彼に対してまず地下深くにその身を置き、安全に周囲から魔素を吸収して最初の成長の足がかりにする事を推奨した。

通常のダンジョンの迷宮核も、最初は皆そうして十数年ほど地下に潜り、無機系魔素を中心に吸収しつつ、微量の有機系魔素も得て、力を蓄えるのだと。そうして、ある程度の形が整ってから地上と接続し、生物を誘い込むダンジョンとして稼働し始めるのだと説明した。

——しかし、彼はセオリーを無視するタイプだった。

「んなちゃんたらやってられるか、スタートダッシュが肝心だ！」

流れ込んできた迷宮構築の手順と必要な魔素量についての情報を分析し終えた彼は、これらを組み合わせれば街づくりゲームと同じ事ができると気付いた。

凝った建物や施設を造るには相応の魔素が必要になるが、迷宮核の影響範囲を広げれば無機系魔素の吸収効率も上がるし、魅力的な街ができれば人も集まる。有機系魔素は住人から摂取すればいい。

結局、彼は迷宮核己が身を地上に置いた。

枯れた泉の底に佇たまたまむリムの、すぐ傍に現れる迷宮核。

リムが最初にその身を隠すべく造られるはずだった地下空間はない。困惑くわんごんに揺らめくリムと剥き

出しの迷宮核が、すり鉢状の乾いた地面の上に並んで鎮座していた。
生まれたばかりの迷宮核を導こうとしていたリムは、とんでもないハズレ魂を引いてしまったと、己が命運を悲観するのだった。

1

この世界で稀に発生し、貴重な魔力の源にもされている魔核。常に拡大と成長を望む魔核は、自らを護りながら成長の糧である魔素を収集する迷宮核を生み出した。

本来なら地下深くに現れ、十数年かけて力を蓄え、ダンジョンを形成して獲物を呼び込むのが、この世界の迷宮核に求められる基本的な役割と動きになる。

——だが、どこかの世界から呼び込んだ『街づくり好きな魂』を宿らせた結果、迷宮核は地下迷宮を造らず地上に顕現していた。

そうして無防備な魔核、リムと並んでいる。

「おお、大量の魔素が入ってくるじゃん」

生命溢れる地上には、多くの魔素が大気の流れに乗って漂っている。

なお、地下ではそうはいかない。地下深くでも強い魔物の骸が埋まっている場所などには大量の



魔素が含まれていたりする場合もあるが、そこにたどり着くのは迷宮の拡張によるその区画の取り込みが必要だ。魔核と迷宮核は基本的にその場所から動く事はないので、己が安全を護りつつ魔素を吸収する範囲を拡げていくのが、本来のダンジョンの在り方である。

いきなり地上に置かれて諦め^{あきら}の境地に至りかけているリムは、最初はダンジョンマスターになる事を拒絶していたこの街づくり好きな迷宮核の魂が、活発に動き始めるのを呆然と見ていた。

「まずは水の生成からだ」

枯れた泉に水を生成して、すり鉢状^{くぼ}の窪みに水を満たしていく。リムと迷宮核は泉の底に水没したが、特に支障はない。

迷宮核が生成した水で埋められた泉は『迷宮の泉』となり、ここを中心としたダンジョンが生まれた。

泉しかない、迷宮ですらない地上のダンジョン。

泉と隣接する地面が取り込まれ、ダンジョンの領域が少し広まっていく。

「で、ここはセーフゾーン指定だな」

そこそそ育ったダンジョンには、生み出した魔物を近づけないようにした安全地帯（セーフゾーン）を設定している場合が多い。そうする事で、侵入者たちは安全地帯がある場所まで潜ろうとするようになる。活きのいい侵入者をダンジョン内に長く滞在させれば、それだけ魔素の吸収も捗^{はかど}るのだ。

森の中にぽつんと存在する、迷宮の泉。その泉周辺を安全地帯に設定した事で、魔核や迷宮核の気配に怯えていた森の動物たちが、安全に飲める水を求めて近づいてくる。

「よしよし、この調子で魔素の吸収エリアも拡げて、ポイントを爆速で貯めていくぞ」

魔素から生み出される水で枯れる事のなくなった豊かな水場。この安全地帯を中心に、ダンジョンの領域を薄く広く、周囲の森全域へと拡げていった。

地下迷宮部分がないために、領域内と領域外の境界が曖昧^{あいまい}なまま拡がっていくこのダンジョンは、誰にも気付かれる事なく、広大な森を呑み込んでいった。

※ ※

ダンジョンに変貌^{へんぼう}しつつある森。そんな森から少し離れた場所にある、小さな村にて。

軒先で弓の手入れ^{へんぼう}をしている年老いた獵師が、これから森に向かおうとしている村の若者たちを見やりながら思考に耽^ふる。

最近、西の森の様子がおかしい。

彼が子供の頃は多くの動物が棲^すみ、木の実や果物、葉草もよく採れる豊かな森だった。

しかし十年ほど前、森の奥の泉が枯れてから徐々に動物も少なくなり、他所^{よそ}から流れてきた魔獣が棲み着くなどして危険が増え、森から得られる恩恵も失われていった。

近年まで薪まきにする木の伐採はっさいくらいでしか森に入る事はなくなっていたのだが、このところやけに動物の気配が多く感じられる。

そんな森の変化について考えを巡らせていた時、村の入り口が騒がしくなった。「奥の泉に水が戻ってる！」

森に入っていた若者たちがそう告げながら、そこで狩ったという鹿を自慢している。

年老いた獵師は、本当に枯れた泉が復活したのか、また別の泉が湧いたのか、直接確かめるべく重い腰を上げた。

森に入ってしまったら進むうち、老いた獵師は違和感を覚えた。

森全体に感じる気配がおかしい。常に何かの視線を浴びているような、大きな生き物の傍にいるかのような、自然の森らしからぬ存在感に警戒心を抱く。

やがて森の奥にある開けた場所に出ると、そこには満々と水を湛たえる泉があった。周囲には水を飲みに来た小動物の姿も見える。

「これは……地下で大きな水脈にでも繋がったか？」

老いた獵師の記憶にあるこの泉は、もっとこぢんまりとしてささやかなものだったはずだ。

助走をつけて跳べば子供でも越えられるほどの、湧き水から広がった小さな泉が、今はちよつとした池ほどの大きさになっている。

そして、この一帯を覆う空気が妙に清浄せいじようなものもおかしい。泉の縁たむろに屯する動物たちが、老いた獵師の姿を見ても逃げ出さない。まるで聖域せいいくのような場所に感じる。

ここには特別な何かがある。老いた獵師は急いで村に戻ると、村長に相談して明日にでも街の教会に知らせるべきだと動き出した。

2

魔素の吸収範囲を優先して薄く拡げつつ、迷宮の泉の拡張をしていた街づくり好きな迷宮核は、魔素の吸収エリアに新たな生命体の侵入を感知した。

「お、人間だ。魔素の増え方ハンパないな」

人間が侵入した事により、魔素の吸収率がぐんと伸びる。のんびり水を飲んでいた鹿が狩られたりしているが、その瞬間も魔素が大きく吸収された。

街づくり好きな迷宮核の魂は「これで次のステージに行ける」などと喜んでいるが、隣で不貞寝ふてねするように沈黙していたリムは、もう人間に見つかってしまったのかと絶望している。

「森の近くに人が住んでるのなら、まずはそこまでダンジョンを延ばそうかな」

隣でリムが「何言ってるのこの子!？」というような反応を見せるが、街づくり好きな迷宮核は気

にせず迷宮拡張の作業を進めていく。

地形を操作して溝を作り、泉から水を流して小川を形成する。

なお、既に森の全域はダンジョンの領域として取り込まれているので、これらの作業はほとんど一瞬で終わった。

一晩で森の外まで延ばした溝の終点に、森の奥から流れてきた迷宮産の水が溜まっていく。やがて溢れた水が周囲の地面を侵食して、そこをまたダンジョンの領域に取り込んでいった。

それによって、森の外の様子を見られるようになった迷宮核は、人の姿を探した。

「ふーむ？ 向こうに建物が見えるな」

木と石で組まれた小さな家々と、広い範囲にわたって設けられた木の柵。畑らしき場所も見える。規模としては小さな村くらいだろうかと当たりをつけた迷宮核は、その村に向かってダンジョンの領域を拡げていった。

「むむ、これ以上は厳しいか」

しかし、村まであと少しというところでダンジョンの侵食速度が鈍った。

森の奥からここまでは緩い傾斜がついていたので、溝を作って水を流すだけでダンジョンの領域を延ばしてこられたが、村のある土地は周囲よりやや高くなっているのだ。

行き先を失った水が、村の外に大きな水たまりを作り始めた。

「村を水没させるわけにはいかないからな。ここは池にして少しずつ拡げていくか」
やがて、村を囲む堀のような貯水池が形作られていった。
迷宮の泉の底に鎮座するリムは、この迷宮核が何をしたいのか理解できず、ただただ彼の隣で成り行きを見守っていた。

※ ※

「村長！ 村長！ 大変だあー！」

その日、村長宅に血相変えて駆け込む村人たちの姿があった。何かと聞いてみれば、村の周りに水堀ができていたのか。

「水堀？」

「とにかく来てくれ！ ありゃあ、ただ事じゃないっ」

そう急かされて村の出入り口までやってきてみれば、確かに村を囲う防護柵からそう離れていない場所に広い水堀ができていた。

自然に湧いた泉や水たまりではなく、明らかに人の手が入っている貯水池のような水堀だった。

「これは……」

「昨日の夕方までこんなのはなかった。一晩で現れたとしか思えねえ」

「でも、夜に作業してる奴なんか誰も見てねえんだ」

「あと、この水って西の森から流れてきてるみたいですよ」

「森から？」

水堀の周辺を調べていた村人たちに案内されて村の西側に回ってみると、森の方からまっすぐ延びた不自然な小川が、謎の水堀に繋がっていた。

小川の周りでは、子供たちが葉っぱの船を流して遊んでいる。

「おいつ、お前たち危ないぞ！」

「そこから離れなさい！ 水堀に近づいても駄目だ！」

村長を案内してきた村人たちは、無邪気に遊ぶ子供たちの姿を見て慌てながら叫ぶ。得体の知れない現象が起きているのに危機感がなさすぎると頭を抱えていた。

この村で最も頼りになる老いた猟師は、教会のある近場の街に出掛けて留守にしている。

村長は、今村にいる若い衆と自分たちだけでこの異変に対処しなければならぬと、村人全員に緊急召集をかけるのだった。

3

村を半周分ほど水堀で囲んだあたりで急激に魔素の吸収量が増えた。どうやら村人たちが水堀や小川の近くに集まってきているようだった。

「いいぞ、一気に魔素が貯まった。そろそろオブジェクトの設置いけるかな？」

ここまでほぼ僅かな地形の操作のみでダンジョンの領域を拡げてきた街づくり好きな迷宮核は、森の一面に開けた空き地を作ると、そこにオブジェクトのサンプルを組み始めた。壁や床、屋根の一部など、オリジナルデザインの建物を建てる時に、予め型を作っておき、それらをコピーして効率よく組み上げるといふ、ゲームでは定番のやり方だ。

「まずは水場回りの施設から充実させていこうか」

石材を組み合わせて正方形の床石ブロックを作ると、いくつか並べて具合を見る。そうして、現在の総魔素量と床石ブロックを一つ作り出すのに必要な魔素量を確認した。

「結構余裕あるな。あとは柱と屋根と……壁はどうするかな。排水の問題は——リサイクルか」

水堀周辺を埋めて開発していく構想を練りながら、ダンジョンの領域内につくった街で、人々にどんな生活をさせようか。想像を膨らませて楽しむ街づくり好きな迷宮核。

そんな彼の隣で、リムは相変わらず理解不能な思いを抱きながら沈黙していた。

ダンジョンの一端が多くの人間に見つかってしまったので、魔核を狙う冒険者なる存在が押し寄せてくるのも時間の問題だ。そうした不安に苛まれながらも、迷宮核が何かを起こそうとするたびに必要な知識を与え、見守るしかなかった。

その後、オブジェクトのサンプルがあらかた仕上がり、水堀の周りも広い範囲でダンジョンの領域に取り込めたので、迷宮核はさっそく水場施設の建設に取りかかった。

ちなみに、迷宮核が造ろうとしている施設は、迷宮の泉を素にした水汲み場だ。村の側にそれを造り、村人に利用してもらおうと考えているのである。

水堀の周囲を床石で固めて整え、堀の内側も土を固めた状態から石の壁に変更して縁を作り、底まで続く階段も生成する。

生活用の水汲み場と洗い場を作り、沐浴用の水場も離れた位置に造る。この頃には村を囲う柵の近くまでダンジョンの領域に取り込めていた。

「もうちょっと魔素が貯まったら、村の中まで一気に進出しようかな」

水堀を造るところまでは僅かな地形操作と迷宮産の水を流しての侵食で領域を拡げてきたが、オブジェクトを建てられるようになった事で、地形の高低差を一気に越えられる手段を得た。

村を含めた付近一帯を呑み込むようにダンジョンの領域化を進める一方で、魔素の吸収エリアを

拡げる事を優先して表面を覆うように、薄く広く取り込んだ最初の森の侵食も進んでいる。

地面の地下深くまで浸透してダンジョン化してしまえば、大規模な地形操作で森全域を一気に造り変える事もできるだろう。

当然、それほどの地形操作ともなれば相応の魔素が必要になる。

「準備が調うまではこの村で魔素稼ぎだな」

※ ※

村人たちは混乱していた。突然水堀の周囲が整地されたように平らに均されると、足元の地面が立派な石畳で覆われた。

石の柱が生えて屋根が象られ、水堀の中までいつの間にか石材で固められている。

「な、なんだっ？ 何が起きている！」

「すぐにここを離れよう！ 皆を村まで避難させるんだ！」

謎の水堀を調べに来ていた村の大人たちは慌てて村に引き返そうとするが、小川の周りで遊んでいた子供たちは怖いもの知らずで好奇心の塊だ。

小川に流した葉っぱ船を追いかけ、水堀の周りに出現した石造りの建物に興味津々で飛びついた石の柱をよじ登ったり、屋根の縁にぶら下がったり、石の長椅子に寝そべったりと、やりたい放題

である。

最初は気が気じゃなかった村の大人たちだったが、きゃつきゃつとはしゃいでいる子供たちの様子を見て、恐る恐る石造りの建物と水堀に近づいていく。

「危険は、ないのか……？」

「ほんとに大丈夫か？ これ」

今のところ、地面が突然変異するような現象は治まっている。石畳をとんと叩いて何も変化が起きない事を確かめ、改めて建物を観察した。

石畳と水堀を覆う石材は艶のある濃い灰色で、石柱や屋根、長椅子は白っぽい石できている。

「これは……昔、大きな街で見た事がある水汲み場のようだ」

村長がポツリとそんな事を呟いた。

4

森の近くに見つけた小さな村の傍に、迷宮の泉を素にした水場を作ってから数日が経過した。

村人たちは便利な水場施設を利用するようになり、魔素も大量に貯まっている。

途中、村の外から来たらしき人がダンジョンの領域内に入ったのだが、魔素の増え方が村人たち

の比ではなく、しばらく静かだったリムは「冒険者が来た」と怯えて騒いでいた。

だが、街づくり好きな迷宮核にとっては、人間⇨大量の魔素をくれるポーンナスという認識である。彼らは小川をたどって森の中まで踏み込んできたものの、リムと迷宮核がいる奥の泉のところまでは来ず、オブジェクトサンプルが置いてある広場でウロウロしたあと、引き返していった。

「もうちょっと森に滞在してほしかったなあ。宿泊小屋でも作っておくべきだったか」

魔核から「やめてっ！」と訴えているような圧を感じるが、いつも通り気にしない。

それはさておき、十分な量の魔素が貯まったので、迷宮核は予定していた村の中まで進出するダンジョン領域の大幅拡張計画を実行に移す事にした。

水場からじわじわ侵食して抜けた領域は、村を囲う柵の内側まで到達している。ちょうどいい目印になるので、柵に沿って広く等間隔に基礎の石ブロックを設置していく。

綺麗な円形にはならなかったが、村をぐるりと囲むように石の台座が並んだ。ここから各台座に魔素より生成した石材を継ぎ足しながら、アーチ状の柱を伸ばし始める。

やがて、村全体を覆う鳥籠のような、格子状の円蓋が現れた。

「ここで水の生成だ」

格子の円蓋に生成された迷宮の水が、雨のように村の敷地内へと降り注ぐ。

地面に染み込んだ迷宮の水と、柵の内側まで進んでいたダンジョンの領域化した部分との結合により、ものの数分で村全体をダンジョンの一部として取り込めた。

「よし、狙い通りだ。ドームは撤去して村の整備からだな」

村全体を覆っていた格子状の円蓋が消えて、迷宮の水の雨もやむ。

この村も最初の森と同じく、ほぼ地面の表層部分を取り込んでいる状態なので、建物を移動させるなどの大きな地形操作をするには、もう少し侵食が進むのを待たねばならない。

なのでとりあえず、村の中に石畳を敷いて足元を整え、中央付近に皆が使える石造りの円形な水場を用意して尽きる事のない水を生成——迷宮の泉を設置した。

「結構魔素使ったから、建物用意するのは次の機会だな」

街づくり好きな迷宮核は、村民の家屋と宿泊施設のどちらを優先すべきか考える。

魔素の貯まり具合はなかなかの速度で増している。

ここまで迷宮核^核がやっている事の意味がわからなかったリムも、この成長速度は流石^{さすが}に異常だと感じ始めた。

初めはとんでもないハズレ魂を引いてしまったと嘆いていたが、もしかしたら稀に見るアタリを引いたのではないかと、俄^俄かに期待が湧いてくる。

リムは、迷宮核にダンジョンマスターとしての活動アドバイスをする。

「有機系魔素の吸収には、生命の奪取が最も効率的よ。だから、魔素と瘴気^{瘴気}より生み出せし尖兵^{尖兵}を——」

「いま集中してるから静かに頼む。つか、育てて増やそうとしてるのに刈り取ってどうすんだ」

魔物とかの出番はしばらく必要ないからと、村から街への規模拡大計画に没頭する迷宮核。

「……」

速攻でダメ出しされてモヤるリムなのであった。

※ ※

街の教会に森の異変を知らせた老いた猟師は、調査に派遣される神官と、冒険者ギルドから護衛の冒険者二人を伴って村に帰ってきた。

「な、なんじゃこれは……」

だが、目に飛び込んだできたのは、見慣れたはずの辺境の小さな寒村には似つかわしくない立派な石造りの水堀だった。水汲み場や沐浴用の施設まで併設されている。

村人たちに迎えられ、村長宅に直行しがてら何があったのか説明を受けるも、ほぼほぼ何もわからないという内容だった。

ある朝、村の周りに水堀が出現していた。周囲を調べていると、突然石畳が敷かれて水場施設が現れた。危険はなさそうなので今は便利に使っている、との事。

村長宅の広間にて。村長と老いた猟師。調査員の神官。護衛の冒険者二人。それに説明役の村人が数人、テーブルで向かい合う。調査員の神官は、村人たちの話をメモに取っていた。

「とりあえず、問題の森を調べてみましょう」

一晚で巨大な水堀を造ったり、村人たちがその場にいる状態で石造りの施設を造り出すなど、土を操る系統の相当な腕利き魔術士が複数人いても難しいと思われる。

調査員の神官と護衛の冒険者曰く、おおよそ人の仕業とは思えないとの見解だった。

「悪戯好きの妖精でも棲み着いたか」

「森の奥にあるという清浄な空気に包まれた泉も気になりますね」

「猟師の爺さんが言う『気配』ってのが少し引つかかるぜ」

彼らは話し合い、明日にも西の森まで調査に向かう事となった。道しるべに、森からまっすぐ延びている不自然な小川をたどっていかうと予定を立てる。

翌日、小川をたどって森に入った調査隊一行は、開けた一画に奇妙なオブジェが立っている空間を見つけた。

「なんだこりゃ……」

それは建物の壁や床の一部だったり、柱だったり。何かの台座っぽい物もある。いずれも石材で造られており、適当な間隔で地面から生えたようにポツポツと立っているのだ。

なぜこのような物が置いてあるのか意図がわからず、薄暗く謎の気配も感じる森の中にいる事も相まって、より不気味に感じさせた。

それら謎のオブジェを調べていた冒険者の一人が、少し顔を強張らせながら立ち上がる。

「何か、わかりましたか？」

「……こいつは多分、ダンジョンに関係してる」

「ダンジョンだって!？」

調査員の神官の問いに、そのベテラン冒険者は神妙な雰囲気ですぐ答えた。もう一人の若い冒険者が驚いたように声を上げる。

このまま進むのは危険と判断したベテラン冒険者の提言を受け、誠実な神官は調査を中止して引き返す事を選んだ。

「奥にあるという泉を調べたかったです、仕方ありませんね」

「賢明な神官殿で助かったよ」

もしダンジョンが関わっているなら、どんな危険が潜んでいるかわからない。いきなり地下迷宮に落とされるような畏がないとも限らないので、早急に森を離れて専門家の応援を呼ぶべきだ。

ベテラン冒険者はそう忠告する。

「村の連中にも森には近づかないように言っておいた方がいい」

場合によっては村を棄てて避難する事も視野に入れておくようにと、村長には注意喚起を促して、調査員の神官と護衛の冒険者は去っていった。

村がダンジョンの領域に呑み込まれたのは、それからすぐの事であった。

森近くの小さな村をダンジョンの領域に加えた街づくり好きな迷宮核は、この村を起点に大規模な街を興すべく活動を始めた。

「まずは生活環境の向上だな。畑も半分くらい領域に取り込めてるし、移動させるのはあとだ」

ダンジョンの領域上につくる街には、通常の土地につくられる街に比べて、いくつかなくてはならない施設を省略できる。

まず、水は魔素の続く限り無限に湧く。そして排水などゴミ処理の問題は、ダンジョンに吸収して魔素に変換——リサイクルできるので。

人や動物の出した排泄物の類も吸収できるので、常に清潔な状態を保てる。

環境設定次第でカビも生えないし、迷宮核自身が微生物の存在や特性を認識しているので、生物に悪影響を与える病原菌の発生も抑制できる。

ダンジョンの領域上の街にいる人の身体の調子が自然と良くなるという寸法だ。

次々と浮かぶアイデアをまとめながら、それらを街に組み込むべくダンジョン内の環境を整えていく街づくり好きな迷宮核。

「気温は触らず自然に任せるか。四季はあるのかな？ 春と冬くらいはありそうだけど」

暑い時期と寒い時期があれば、住人もそれに応じた装いをするはず。衣類の発展を期待して綿花や麻など布の材料になる草花を充実させておく。

「いずれ冷暖房に水道、トイレ、風呂付きの戸建てでも用意するとして、今は村の中の整備だ」

村全体の主な通り道に石畳を敷き終えると、準備しておいた街灯を等間隔に建てていく。これは木と石で組み上げた柱の先端に光を灯すオブジェを取り付けた物だ。

蓄光の性質を持つ植物と鉱石を交ぜた物を使っているので、昼間に光を蓄えて夜の間に光る。一応、補助的に魔素も使って光度や時間調整はしてある。

「よし、最初はこんなもんだな」

村の環境がある程度整えた迷宮核は、再び魔素が貯まるのを待ちながらダンジョンの領域外に向けて斜めに傾いた柱を立てては、その先端に水を生成。水撒き方式で領域を拡げていった。

「うーん、水撒き用の柱をちよつと改良しようかな」

領域が拡がるにつれて、魔素の貯まり具合も徐々にだが増えていく。領域内に新しく生命体が入った時ほどのような大きな増え方はしないが、ダンジョンの領域は広ければ広いほど良いようだ。街づくり好きな迷宮核は、水撒きによる領域拡大の効率を上げるべく、放水装置を組み上げた。

仕組みは単純で、まず柱の中を空洞にしてその中に水を生成。柱の先端には放水用のノズル。そ

して、トラップ用の単純な動きを繰り返すギミックを柱の中に仕込む事で水圧を操作する。

この装置により、結構な距離まで水が飛ぶようになったので、いい感じに散水できるようノズルを調整して水撒き効率を上げた。

「これ、畑の水やりにも使えるな。あとは消防設備とかにも転用できそうだな」

水道関連や他の設備を作るのにも良い練習になりそうだと、トラップギミックを使った便利な生活用品全般の地下作りも並行して進める。

水撒きの効率が上がった事で、ダンジョンの領域化もかなりの速度で進むようになった。が、ここで一つ問題が浮かぶ。

「結構広くなったけど、村の人口が全然増えてないなこれ」

街づくり好きな迷宮核は、ダンジョンの領域はこのままじつくり拵げていくとして、とりあえず住人を呼び込むべく優先的に道を整備しようという方針を定める。

「この前の冒険者は、こっちの道から来たんだってな」

その道に沿って領域を延ばしつつたどっていけば、冒険者たちがいるどこかの街に繋がるはず。既に在る街を取り込んで弄るのも悪くないが、街づくり好きな迷宮核としては、やはりオリジナルの街をつくりたいので、何とか新しい住人を村に呼び込みたい。

「できれば魔素の増え方が半端ない冒険者を呼び込みたいところだけど——」

リムからは「やめとけ」という圧を感じるが、既にいつもの事なので流す。住人が快適に暮らせる環境は整えたものの、この村には今のところ売りになる物がない。

「先に何か特産品を作って商人が来るようにしようか」

道を領域化しながらたどる作業も進めつつ、森の方で村の特産品になりそうな物が作れないか、迷宮構築の知識を掘り下げる。

「ん〜、葉草に果物か。元から森にあった恵みにダンジョン特有の要素を足して、ここでしか採れない特別な採取物とか作れそうだな」

栄養価が高く、腐りにくく長持ちで、短時間で大量に生る果実の木なんてどうだろうか、街づくり好きな迷宮核はダンジョン内に魔素から作り出す植物を設計する。

ダンジョンでしか採れない貴重な葉草などは、本来は迷宮に獲物を呼び込むための餌として使われるもののだが、街づくり好きな迷宮核は村興しの一環として用意する。

「うん、食える物から作るのは、村の食糧事情も地味に支えられて悪くない」

なかなか良いアイデアだと自賛する街づくり好きな迷宮核は、さっそく森の浅い場所に果樹園を構築。設計した果実の生る木を並べていく。

この果樹園と実を最初に発見したのは、やはり村の子供たちであった。

老いた獵師が呼んできた冒険者と神官の調査員が、森にダンジョン発生まきの兆しがあると危険性を訴え、専門家の応援を呼びに街へ発つてから数日。

村の景色は一変していた。

長閑な寒村のどかの田舎道にことごとく石畳が敷かれ、立派な街灯まで等間隔に並んでいる。まるでどこか大きな街の一面を切り取ってきたかのような光景があった。

「こ、これ本当に大丈夫なのか？」

「神官様たちが危ないって言ってたけど……」

「でもすごい歩きやすいな、これ」

「夜でも明るくて安心する」

村の周囲では、時折斜めに傾いた柱が生えて水を吐き出すという謎の現象が続いている。

その柱は日を追うごとに遠くに離れていき、水をダバダバ垂れ流しては離れた位置に生えるというのを繰り返していたが、ある地点からすごい勢いで放水するようになっていた。

水を噴き出す謎の柱が、村から目視できないほど遠くまで離れた頃には、村人たちは今の環境にすっかり馴染なじんでいた。

何せ快適。とにかく快適。あまりにも快適なので、危機感などすっかり消え失せていた。

最近では各家の中に水が湧き出る槽が生えており、水汲みの労力がなくなった上に、洗濯や沐浴も家の中でできる。

そして、この尽きる事なく湧き出る水を飲むと、身体の調子も良くなるのだ。

そんなある日、村に行商人がやってきた。

辺境の村にダンジョン発生まきの脅威が迫っているらしいという街の噂を聞きつけたその行商人は、儲けるチャンスとばかりにすぐに動いた。

村から避難するにせよ、その土地に住み続けるにせよ、何かと入り用になるはずだと食糧や衣類、日用品も準備して意気揚々と稼ぎに出たのだが、道中でかなり困惑する事になる。

街からその村までは寂れた一本道のはずだったが、途中から道幅は広くなり、明らかに整備された街道が敷かれていたのだ。

確かに一本道だったので、道を間違えたわけではない。

(もしかや、結構な資金が投入されている大貴族肝入りの開拓村か?)

もしそうなら物資は潤沢にあるはずなので、自分が用意した程度の商品では大して売れないかもしれない。そもそも商売の許可が下りないだろう。

そんな不安を抱えつつも、今さら戻れないので村を目指して進み続けた行商人は、そこから色々

と不可解な光景を目にする事となった。

まず、この辺りはかなりの辺境の地であるはずなのだが、広い街道に石畳が敷かれていた。

行商人は年に一度、この国の王都に向かう機会があり、王都に近しい大きな街との間に、石畳が敷かれた短い街道を見た事がある。

が、この石畳の道はさらに両側に街灯まで並んでいた。それも、油や蠟燭ろうそくを使った灯りではなく、王都の上流区でしか見る事のできないような、魔鉱石まこうせきの光を放つ街灯だった。

そんな豪華な仕様の道が長い距離まで続き、その先に魔鉱石の光に照らされた立派な街のような村があった。

ゴミ一つ落ちていない清潔で立派な石畳の通りを行くと、村の中央には大きな石造りの水場がある。村全体が妙に清浄な空気に包まれ、夜でも街灯の明かりに溢れている。

が、そんな貴族街のような空間に立つ家々は実に素朴な——というか、率直にボロ小屋と言って差し支えない寒村仕様な建物ばかり。

行商人を見て珍しそうに寄ってきた住人たちも、出で立ちは辺境に住む村人そのものだった。

あまりにアンバランスな村の様子に戸惑いながらも、行商人は営業を始める。持ってきた商品は、普通によく売れた。

「いや、アンタが来てくれて助かったよ」

「しばらく買い出しにも行けなかったからねえ」

歓迎する村人たちの話によると、少し以前から村に異変が起きており、その関係で街に出掛ける事もできなかつたという。

定期的に行われていた村を代表しての買い出しが滞とまっていたため、街でしか手に入らない日用品が不足していたそう。

「街では、村の近くにダンジョンが発生しそうになってるって噂を聞いたんだが……」

「ああ、この前それを調べに神官さんと冒険者の人が来てたよ」

「森が危ないって話だったけどねえ。今じゃ村もこんな感じだし、どうなんだろうねえ」

最初に村の周りに水堀ができる大きな異変があったあと、定期的な村のあちこちで道が整備されたり水が通ったり、灯りがついたり。便利な設備が家の中に追加されたり、と色々起きているが、特に危険は感じていない。

村人たちはこの異変を受け入れて快適に暮らしているのだという。行商人は、この奇妙な村に興味を抱いた。

何かこの村特有の、他所で売れそうな珍しい物はないだろうかと思考を巡らせる。

その時、両手で籠を抱えた村の子供たちが、危なげない足取りで駆け寄ってくると、行商人に取り引きを持ちかけた。

「おっちゃん、これ買ってくれない？」

「森で採れたの。おいしいよっ」

子供たちは、寵いっばいに詰まった薄紅色の果実を差し出して笑った。

6

ダンジョンに取り込んだ村に第一行商人がやってきてしばらく。
周囲の土地を侵食して領域を拡げていた街づくり好きな迷宮核は、土地の拡大を一段落させて街道整備に注力していた。

行商人がやってきた街道をダンジョンの領域に取り込んだでは、拡げて均して石畳を敷いて街灯を建てる。一定間隔で休憩できる広場を作り、迷宮の泉を設置して給水スポットにした。飼葉にできそうな牧草ゾーンも併設しておいた。

「これで大勢の人が来るようになってもスムーズに通れるはず」

もうそろそろ街道の先にある街に繋がるだろうかというところで、ダンジョンのオブジェクトにダメージが入った事を知らせる信号が届いた。

「んん？ 水撒き用の柱が攻撃されたのか？」

その地点に意識を向けて付近の様子を窺う。

まだ領域化していない手つかずの細い街道と、拡げて均した整備途中の街道との境界付近で、地

面から生やした石の柱に、打ちかかっている者たちがいた。

装いからして冒険者のようだ。十数人ほどの冒険者たちは、手にハンマーやメイスのような鈍器を持って水撒き用の柱を叩きつけている。

攻撃しているグループと、その様子を見ながら後方で待機しているグループ。そして彼らを指揮しているっぽい、他の冒険者より装いも豪華な強者感のある髭の男性。

彼の隣には以前、森のオブジェ置き場までやってきた事のある神官と二人の冒険者もいた。

どうやら街道のダンジョン領域化を阻止しようとしているようだ。

「今の魔素量なら、上位種の魔物を呼び出す事も可能よ」

状況を認識したリムが即座に冒険者たちの撃滅案を出してくるが、街づくり好きな迷宮核は当然のごとくそれらを却下。

別に対峙する必要はないのだと、事前に考えておいた手を打つ。

「こういうイベントも当然あるだろうって想定してたからな」

水撒き用の柱はダンジョン内のオブジェなので、多少壊されても自己修復する。見た目は細い石の柱だが、その丈夫さは鉄の塊かと思紛うほどだ。

ここまで領域化した道の先端に一本だけ生やしていた水撒き柱を二本に増やし、彼らを迂回するように左右に放水。

濡れた地面を領域化すると、街道と同じ高さに盛り上げ、均し、拡げて道を形成していく。

増えた柱と変異する地面に、驚く冒険者たちは慌てて柱を壊そうとするが、放水ノズルが損傷する前に十分な水撒きを済ませられる。新たに延びた街道の先に柱を生やし直してまた放水。冒険者たちは後方で待機していたグループも加わり、全員で柱の破壊に乗り出した――が、止められない。

「この部分は広場にしよう」

街づくり好きな迷宮核は、冒険者グループを左右に迂回した事でできた真ん中の空き地の部分にも放水してダンジョンに取り込むと、中心に噴水オブジェ付き迷宮の泉を設置。

噴水付き泉の周囲にはベンチを並べて憩いの場にした。

そして、冒険者たちが街に向かって延びていく道の先端に生える石柱に気を取られている間に、

噴水広場一帯を石畳で固めて、ここまで延ばしてきた整備済みの街道と接続した。

「広場の外周とベンチの傍にも街灯を立てて、と。これでよし」

街道と繋がる『良い感じの広場』ができた。

まだダンジョンの領域に入っていない細く荒れた街道の先には、この世界の街らしき影が見える。街を出て少し進んだ先にあるこの広場は、街づくり好きな迷宮核が運営するダンジョンの街に向かうための、出発地点として使えるはずだ。

この広場を中心に馬車用の駐車スペースや露店用スペースをつくれれば、ちょっとした街道沿いの中継街になるのではと構想を膨らませてワクワクしている街づくり好きな迷宮核。

その時、伸長を続けていた水撒き領域化の範囲拡大がピタリと止まった。まるで堰き止められたかのように、放出した水は柱の元へと落ち続けている。

街づくり好きな迷宮核がそちらの様子を見やると、水撒き柱の正面が大きな壁に遮られていた。

「むむ？ これは……」

どうやら魔法で出した岩の壁らしく、迷宮産の水が侵食しにくい。

魔法による炎や氷、岩などの物体は、ダンジョンの中でも即座には分解されずしばらくは残る。魔法の効果が切れて魔素に戻れば、相応に大量の魔素を吸収できるようだ。

現在、領域化した街道の先端を囲むように、魔法の岩壁が行く手を阻んでいる。

「これ以上は街に近づけさせたくないみたいだな。まあちょうどいいや。武器の実験ができる」

放水の角度を変えれば、壁の向こうまで水を撒くのは容易だ。しかし、ここまで強く拒まれているなら、これ以上の領域拡大による接近はやめておいた方が良いと判断した。

先ほどの迂回と広場づくりで大勢の冒険者たちがダンジョンの領域内に踏み入れており、大量の魔素を吸収できている。

街づくり好きな迷宮核は、それらの魔素を使って新しく攻撃用の放水柱を設計した。

水圧操作に使っているトラップ用のギミックをより強力なものに交換して、柱の厚みも増し増しに。内部に生成した水をこれでもかと圧縮する。

今まで使っていたのは扉の開閉や床の一部を動かす程度の小型トラップ用だが、新しいギミック

は一部屋分の壁をまるごと動かしたり、重い釣り天井を持ち上げたりする大型トラップ用だ。

森の中に設けたオブジェクトサンプル置き場で実験を繰り返し、威力や使い心地を確かめる。

「よし、これなら使えるか」

リムが興味深そうな意識を向けてくるなか、さっそく完成品を街道の先端に設置すると、魔法の岩壁に向けて使ってみた。

大型放水柱の中でぎゅうぎゅうに加圧された水を超高压で噴射。いわゆるウォータージェットで魔法の岩壁の切断を試みる。

「いいね」

「す、素晴らしいけど……」

結果は満足のいくものだった。リムは感嘆の声を上げつつもドン引きしていた。

魔法で出された岩壁は時間経過とともに魔素に分解されていくが、迷宮産の超高压水流をぶつけられた事で瞬く間に耐久値が削られたらしく、さっくりと切断。

冒険者たちが動揺している様子がわかる。

街づくり好きな迷宮核は、領域化済みである街道の先端に大きめのアーチを作ってダンジョンの領域の入り口を演出すると、ひとまず街道整備をここまでに止めた。

「この街道が安全だってわかれば、人の往来も増えるはず」

それで十分に魔素が貯まれば、また別方向に道を延ばして他の街に繋がればいい。

ここにきて、リムもこの迷宮核のやりたい事を理解したらしく、役立ちそうな知識を投げってきた。「……ほうほう、生命をまるごと吸収すると、その生命体の記憶も参照できる場合があるのか」

7

その知らせは、辺境の村から来たという老いた猟師によってもたらされた。

「村の近くにある古い森の様子がおかしい」

相談を受けた教会は、清浄な空気に包まれているらしい泉を調査するべく神官の派遣を決定。冒険者ギルドにも護衛の依頼を出し、少数の調査隊を件の村へ向かわせた。

その調査隊は、予定の日程よりも早く帰還した。護衛に雇っていたベテラン冒険者の機転により、調査を切り上げ引き揚げてきたという話だった。

「森がダンジョンに吞まれてやがった。ありゃあ明らかに異常だ」

森全体の様子や、近くの村の状況など詳しい報告が上げられると、意見を求められた専門家や有識者からは、古い森や溪谷、遺跡などで稀に発生する『異界化現象』ではないかとの見解が示された。

膨大な魔力溜まりに一定量の瘴気が流れ込み、何らかの条件が整う事でダンジョンが発生する場合があると、迷宮研究者たちの間ではよく知られている。

これは昔、いくつかの大国によって人工的にダンジョンを発生させる大規模な実験が行われた事があり、その時期にダンジョンのメカニズムについて色々と説明がなされていた。

なお、人工ダンジョンの実験が成功した記録はない。

それらの実験で発生したのは、部分的にダンジョンのような環境が地上に現れる異界化現象で、所謂ダンジョンのでき損ないと呼ばれていた。

「それは……地上型ダンジョン、という事でよろしいのか？」

「いや、異界化はあくまでダンジョンのでき損ないだ」

魔力溜まりの範囲にだけ、不規則にダンジョン特有の自己修復する壁や床が出現したり、魔物が湧いたりするが、魔核という力の源を持たない異界化した一帯はすぐに消えてしまう。

「ならば、あの森もそうであるか？」

「俺も最初はそう思ったんだがな。獵師の話と、村の状況と森の様子から——こりや違うなど」

異界化現象なら、あれだけ森と村周辺に異変を起せばとくに魔力切れになって、異変も謎の気配も消えているはず。

しかし、あの森の気配は一向に衰える様子がなかった。

あのまま放置しては危険かもしれない。

冒険者ギルドの特別会議室にて、実際に現地を訪れた調査隊や教会の神官長らも交えて、街の幹部たちが集まり議論しているところへ、緊急の報告が飛び込んできた。

「報告します！ 件の森から発生した異変が街道を侵食し、この街に向かっていているとの事です！」

「っ！ 異界化現象が、拡がってるのか……？」

「あの村はどうなった？」

「最後に確認した斥候によれば、全体が石造りの街のようになっていたとの事です」

「異界に呑まれたか……」

規模の大きなダンジョンでは、階層によって環境が大きく変わるところもある。

その中には、遺跡や古い街並みをモチーフにしたような環境もあるのだが、件の村はそれらに塗り潰されたのだろう。

「こいつあ、イレギュラーなダンジョンフロードだ。中の魔物どもじゃなく、ダンジョン自体が外に溢れちまったに違いねえ」

「では、やはりその森に大規模なダンジョンが発生していたという事か」

場所が辺境だった事もあり、今のところは寒村が一つ呑まれた程度で大きな被害も出ていないが、このまま異界化の範囲が拡がれば大変な事になる。

地上にダンジョンの魔物が湧き続け、常時スタンピード状態などという危険な状況を生み出しかねない。

その後も次々と入ってくる報告によると、侵食された街道は石畳で舗装され、魔鉱石の光を灯す街灯が等間隔に並んでいるという。

「完全にダンジョンの中で見る遺跡とか異国の街のそれだな」

侵食された街道の先端に石柱のような物が生えて、そこから噴き出した水が地面を濡らすと、しばらくしてその部分が盛り上がり、均され、舗装されるらしい。

「そいつが異界化の侵食方法か。ならばまず、その石柱とやらを叩かなきゃな」

「我々冒険者ギルドは大至急戦力を集める。領主様には正規軍の派遣を打診しよう。教会の方々に協力をお願いしたい」

「もちろんです。回復と浄化も使える神官を集めましょう」

斯くして、イレギュラーダンジョンの討伐隊が組織されると、街を出て少し進んだ辺りを絶対防衛ラインに定めて、隊列を組みながら寂れた街道をゆっくり進んでいった。

「前方に異界化現象！」

「っ！ もうこんなところまで」

「本当に石柱から水を吐いてやがる」

「あれに触れるなよ？ 何が起きるかわからん」

「鑑定できる奴はいねえのか」

「正規軍は間に合いそうにないな。我々だけで抑えられるか？」

「進攻を止めるだけなら何とかなるさ」

臨時に編成された冒険者と街軍の混合部隊は、迫りくるイレギュラーダンジョンの脅威を打ち払うべく攻撃態勢に入った。

「クツソ硬てえ……！！」

「そりゃダンジョンの壁壊すようなもんだからな。気合い入れて打てよっ！」

見た目はさほど厚みもない、水を噴き出している白い石柱に、鈍器を叩きつける先鋒の冒険者たち。彼らの後方には不測の事態に備えた対魔物討伐部隊が控えている。

そのさらに後方では、回復要員の神官たちの交じる援護部隊が、作戦の様子を見守っていた。

「よし、ヒビが入った！」

「もう少しだっ」

散布されている水に触れない位置取りで順番に、体勢を替えながら途切れる事なく、各々が見事な連携で必殺の一撃を入れていく。

しかし――

「!? 増えたっ」

「だが、ヒビが入ったやつは消えた！ 新しく生えたやつもこの調子で叩くぞ！」

先鋒隊が攻撃していた正面の石柱が消え、新たに二本の石柱が街道の両端に生えて水を噴き出す。

細い石柱ゆえに攻撃できる範囲は狭く、一度に叩ける人数は限られている。二班に分かれても絶え間ない連続攻撃に問題はなかったのだが、異界化の侵食速度が速すぎた。

「ダメだ！ 足元が舗装されちゃった！」

「長くいるとヤバイかもしれない、なるべく石畳の上には乗るな！」

「うわぁ！ 水がっ——」

「アイツ、まともに浴びやがった！」

「神官さん！ 診てやってくれ！」

「ぶわぁ！ こ、こっちにも——」

「何やってんだ！」

正面の部隊を避けるように、左右へと分かれて水を噴き出す石柱は、突然消えたと思ったら位置を変えて出現し、その一帯まで足元が均され、舗装される。

侵食速度と範囲が急激に拡がった事で、先鋒隊は連携が崩れて大混乱に。後方の部隊も応援に入るが、次々と街道を舗装しながら生え変わる石柱に追いつけない。

そうこうしている内に、先ほどまで後方の部隊が待機していた場所が石畳で埋められてしまい、広場のような空間が造られた。そこに噴水が生えたのを見て、討伐隊の面々が一瞬呆ける。

さらにはベンチや街灯まで並んでいく。まるで憩いの場のような様相だ。

「くっ……！ これ以上の足止めは無理か。仕方がない、後方に合図を出せ！」

「全隊！ 一時撤退だ！ 街の手前まで退くぞ！」

絶対防衛ラインで待機していた魔術士部隊が、討伐隊からの合図を受けて詠唱を始める。

撤退してくる冒険者たちを追うように生える石柱に、タイミングを合わせて編み上げた術を発現させた。

「[[「ロックウオール」]]」

瞬間、巨大な岩の防壁が現れた。異界化した街道の先端を囲うように塞ぐ魔法の岩壁。熟練の魔術士が数人がかりで生み出す魔法の岩壁は、砦の防壁並みの硬さと規模を誇る。

怒涛の勢いで街に迫っていた侵食が、魔法の岩壁の前でピタリと止まった。水を噴き出し続ける石柱は岩壁を超える事もなく、その場で立往生しているかのようだ。

「おお……止めた」

「流石は対スタンピード用の防壁魔法だ」

「よし、今のうちに街の住人を避難させるぞ！」

魔法の岩壁は魔力を注ぎ続ける事で半日は持たせられる。しかし、このイレギュラーダンジョンの侵食による異界化の勢いは、これ以上抑えられそうにない。

そう判断した討伐隊の指揮を担うギルド長は、街が吞まれる前に住人を逃がす決断をした。

「ギルド長！ 石柱が消えたぜ」

「なに？」

街道脇に生える高い木に登り、高所から戦場を俯瞰する斥候冒険者が、魔法の岩壁の向こう側の様子をつぶさに知らせる。

水浸しの土肌を晒していた街道は見る間に均され、幅を拡げ、石畳で舗装されたという。

「あ、また柱が生えた！ さっきまでのよりデカくて太い柱だ！」

斥候冒険者の実況に注目する討伐隊の面々。その時、シャーという不思議なノイズ音が響いたかと思うと、魔術士たちが一斉に呻いた。

魔法の岩壁にかかった強烈な負荷で急激に魔力を持っていかれたという。

そして――

「っ!？」

「バカなっ！」

「嘘だろ……」

異界化した街道の先端を囲うように塞いでいた強固な魔法の岩壁が、まるで熱したナイフに刻まれたバターのごとく、サククリと切り裂かれてバラバラに崩れ落ちた。

新たに生えた太めの石柱からは、斜め上に向かって白い線のような何かが放たれていた。上空で先端が四散して霧状に降り注いだ事で、それが水だと理解する。

水魔法の一種だろうか、魔法の岩壁を容易く切り裂いたソレに戦慄する冒険者たち。

あんなモノで攻撃されれば、ひとたまりもない。

皆に動揺と緊張が走るなか、太めの石柱が消えたかと思うと、異界化した街道の先端部分に変化が起きる。

道の両端から生えた細い石柱が緩い弧を描きながら延びていき、やがて円弧状に繋がると、表面に蔦や花を象った紋様が浮き出てアーチ門のようになった。

「ど、どういう事だ……?」

困惑する討伐隊の前に、イレギュラーダンジョンの侵食は完全に止まり、あとには立派に舗装された異界化した街道が、あの森の村に向かってただまっすぐに続いていた。

8

冒険者たちが集う隣街の近くまでダンジョンの領域化した街道を延ばした街づくり好きな迷宮核は、次の一手に有用な情報をリムが示したので、それを参考に捕獲用のトラップを設計する。

リムが教えてくれたのは、生命体をまるごと吸収すれば、その生命体の記憶情報を参照できる場合があるというダンジョンに備わる？ 機能というか能力。

さっそく街づくり好きな迷宮核は、周辺の地理を把握するべく、鳥をおびき寄せて捕まえる植物を設計。野鳥が好みそうな、ちょうどいいサイズの実をつける肉食植物を街道脇や森の周辺に設置

した。

果実に釣られてやってきた野鳥が一口摘まむと、実の生っている部分に穴が開いて、掃除機のようにズゴーツと吸い込んで丸呑みに。

取り込んだ鳥の記憶からかなりの広範囲にわたって付近一帯の地形を学習した。

リム曰く、「人間を呑み込んだ方が効率がいい」という事だったが、街づくり好きな迷宮核は、「人は育む対象だから基本的に糧にはしない」と明言する。

「まあ相手にもよるかな。その時々で判断しよう」

森の周辺から街道の先端まで。ダンジョンの領域化したエリアを一望する図と、この辺り一帯の地図を重ねて街づくり計画の資料に加える。

街道の先端に設けたアーチ門付近では、今も近くの街から来た多くの冒険者たちが集まって色々と調査をしているようだ。

あれから主立った動きはない。魔法の岩壁を斬り裂いたウォータージェットの威力を警戒してか、無暗な破壊行動は控えているらしい。

こちらからも街に近づく領域化の拡大は止めているので、ある意味膠着した状態だ。

領域化した街道上にこれだけ冒険者が集まっていると、大量の魔素も吸収できて街づくり好きな迷宮核としてはウハウハ状態であった。

「……と、これは——」

街道の中腹辺りに、複数の生物が入り込んだ事を示す反応があった。

その地点に意識を向けて注視してみれば、村を訪れていた行商人が街に向かって移動している姿と、その後方に迫る複数の人影。

発している気配からその者たちの状態が大まかに読み取れる。『略取』『愉悦』『殺意』といった気配を纏っており、その感情の対象を前方の行商人に向けているのがわかった。

「こりゃ追い剥ぎってやつか。糧にするのはこういう輩でいいな」

処理の準備を整えつつ様子を見守っていると、追いついた盗賊が行商人の馬車の周りを取り囲んだ。

機動力重視で短剣しか装備していない、超軽装な俊足組が正面に回り込み、威嚇して足止め。その間にそこそこ武装した本隊が追いついて囲むという連携のようだ。

「よし、じゃあ取り込むか」

街づくり好きな迷宮核は、行商人を守るように壁を設置すると、その周囲にいる盗賊たちを吸収するべく、瞬間設置トラップを起動させた。

※ ※